

# 仙人

芥川龍之介

青空文庫



## 上

いつごろの話だか、わからない。北支那の市まちから市を渡って歩く野天のてんの見世物師に、李り小しょう二じと云う男があつた。鼠ねずみに芝居をさせるのを商売ねずみにしている男である。鼠を入れて置くふくろが一つ、衣装や仮面めんをしまつて置くはこが一つ、それから、舞台の役をする小さな屋台のような物が一つ——そのほかには、何も持っていない。

天氣がいいと、四つ辻よっつじの人通りの多い所に立つて、まず、その屋台のような物を肩へさせる、それから、鼓板こばんを叩いて、人よせに、謡うたを唱う。物見高い街中の事だから、大人でも子供でも、それを聞いて、足を止めない者はほとんどない。さて、まわりに人の牆かきが出ると、李は囊ふくろの中から鼠を一匹出して、それに衣装を着せたり、仮面めんをかぶらせたりして、屋台の鬼門道きもんみちから、場のぼへ上らせてやる。鼠は慣れていると見えて、ちよこちよこ、舞台の上を歩きながら、絹糸のように光沢つやのある尻尾を、二三度ものものしく動かして、ちよいと後あと足あしだけで立つて見せる。更紗さらきの衣裳の下から見える前足あしのうらの蹠あしがうす赤い。——この鼠が、これから雑劇の所謂いわゆる楔子せつしを演じようと云う役者なのである。

すると、見物の方では、子供だと、始から手を拍つて、面白がるが、大人は、容易に感心したような顔を見せない。むしろ、冷然として、煙管を啣えたり、鼻毛をぬいたりしながら、莫迦ばかにしたような眼で、舞台の上に周旋する鼠の役者を眺めている。けれども、曲が進むのに従つて、錦切れの衣裳をつけた正旦せいたんの鼠や、黒い仮面をかぶった浄の鼠が、続々、鬼門道から這い出して来るようになると、そうして、それが、飛んだり跳ねたりしながら、李の唱う曲やその間へはいる白につれて、いろいろ所作をするようになると、見物もさすがに冷淡を装つていられなくなると見えて、追々まわりの人だかりの中から、※子そうしだい 大などと云う声が、かかり始める。すると、李小二も、いよいよ、あぶらがのつて、忙しく鼓板を叩きながら、巧たくみに一座の鼠を使いわけける。そうして「沈こつこう 黒しずむ 江みんぎ 明びせい 妃いち 青せい 塚よゆうのうらみ 恨ゆうむにたうこがん、耐かんきゆうのあき 幽かん 夢きゆう 孤うのあき 雁かん 漢かん 宮きゆう 秋うのあき」とか何とか、題目正名だいもくせいめいを唱う頃になると、屋台の前へ出している盆の中に、いつの間にか、銅銭の山が出来る。……………

が、こう云う商売をして、口を糊のりしてゆくのは、決して容易なものではない。第一、十日と天氣が悪いと口が干上つてしまう。夏は、麦が熟す時分から、例の雨期へはいるので、小さな衣裳や仮面にも、知らないうちに黴かびがはえる。冬もまた、風が吹くやら、雪がふるやらするので、とかく、商売がすたり易い。そう云う時には、ほかに仕方もないから、う

す暗い客舎はたごの片すみで、鼠を相手に退屈をまぎらせながら、いつもなら慌しい日の暮を、待ちかねるようにして、暮してしまふ。鼠の数はすう、皆で、五匹で、それに李の父の名と母の名と妻の名と、それから行方ゆくえの知れない二人の子の名とがつけてある。それが、囊ふくろの口から順々に這い出して火の気のない部屋の中を、寒そうにおずおず歩いたり、履くつの先から膝の上へ、あぶない軽業かるわざをして這い上りながら、南豆玉なんきんだまのような黒い眼で、じつと、主人の顔を見つめたりすると、世故せこのつらさに馴れている李小二でも、さすがに時々は涙が出る。が、それは、文字通り時々で、どちらかと云えば、明日あすの暮しを考える屈託くつたくと、そう云う屈託を抑圧しようとする、あてのない不愉快な感情とに心を奪われて、いじらしい鼠の姿も眼にはいらぬ事が多い。

その上、この頃は、年の加減と、体の具合が悪いので、余計、商売に身が入らない。節廻しの長い所を唱うと、息が切れる。喉も昔のようには、冴さえなくなった。この分ではいつ、どんな事が起らないとも限らない。——こう云う不安は、丁度、北支那の冬のように、このみじめな見世物師の心から、一切の日光と空気とを遮断して、しまいには、人並に生きてゆこうと云う気さえ、未練未積みしやくなく枯らしてしまう。何故生きてゆくのは苦しいか、何故、苦しくとも、生きて行かなければならないか。勿論、李は一度もそう云う問

題を考えて見た事がない。が、その苦しみを、不当だとは、思っている。そうして、その苦しみを与えるものを——それが何だか、李にはわからないが——無意識ながら憎んでいる。事によると、李が何にでも持つている、漠然とした反抗的な心もちは、この無意識の憎しみが、原因になつていゝのかも知れない。

しかし、そうは云うものの、李も、すべての東洋人のように、運命の前には、比較的屈従を意としていない。風雪ふうせつの一日を、客舎はたごの一室で、暮らす時に、彼は、よく空腹をかかえながら、五匹の鼠に向つて、こんな事を云つた。「辛抱しんぼうしろよ。己おれだつて、腹がへるのや、寒いのを辛抱してゐるのだからな。どうせ生きてゐるからには、苦しいのはあたり前だと思え。それも、鼠よりは、いくら人間の方が、苦しいか知れないぞ……」

## 中

雪曇りの空が、いつの間にか、曇まじりの雨をふらせて、狭い往来を文字通り、脛はぎを没する泥濘でいねいに満そうとしている、ある寒い日の午後の事であつた。李小二りしやうじは丁度、商売から帰る所で、例の通り、鼠を入れた囊ふくろを肩にかけながら、傘を忘れた悲しさに、ずぶぬ

れになつて、市はずれの、人通りのない路を歩いて来る——と、路傍に、小さな廟が見えた。折から、降りが、前よりもひどくなつて、肩をすぼめて歩いていると、鼻の先からは、滴が垂れる。襟からは、水がはいる。途方に暮れていた際だから、李は、廟を見ると、慌てて、その軒下へかけこんだ。まず、顔の滴をはらう。それから、袖をしぼる。やつと、人心地がついた所で頭の上の扁額を見ると、それには、山神廟と云う三字があつた。入口の石段を、二三級上ると、扉が開いているので、中が見える。中は思ったよりも、まだ狭い。正面には、一尊の金甲山神が、蜘蛛の巣にとぎされながら、ぼんやり日の暮を待っている。その右には、判官が一体、これは、誰に悪戯をされたのだから、首がなげている。左には、小鬼が一体、緑面朱髪で、獐な顔をしているが、これも生憎、鼻が虧けている。その前の、埃のつもつた床に、積重ねてあるのは、紙銭であろう。これは、うす暗い中に、金紙や銀紙が、覚束なく光っているので、知れたのである。

李は、これだけ、見定めた所で、視線を、廟の中から外へ、転じようとした。すると一度その途端に、紙銭の積んである中から、人間が一人出て来た。実際は、前からそこに蹲っていたのが、その時、始めて、うす暗いのに慣れた李の眼に、見えて来たのであろう。が、彼には、まるで、それが、紙銭の中から、忽然として、姿を現したように思われた。

そこで、彼は、いささか、ぎよつとしながら、恐る恐る、見るような、見ないような顔をして、そつとその人間を窺<sup>うかが</sup>つて見た。

垢<sup>どうふく</sup>じみた道服を着て、鳥が巢<sup>う</sup>をくいそうな頭をした、見苦しい老人である。(ははあ、乞<sup>こじき</sup>丐をして歩く道士だな——李はこう思った。)瘠<sup>せ</sup>せた膝を、両腕で抱くようにして、その膝の上へ、髻<sup>ひげ</sup>の長い頤<sup>あご</sup>をのせている。眼は開いているが、どこを見ているのかわからない。やはり、この雨に遇つたと云う事は、道服の肩がぐつしより濡<sup>ぬ</sup>れているので、知れた。

李は、この老人を見た時に、何とか語<sup>ことば</sup>をかけなければ、ならないような気がした。一つには、濡<sup>ぬれ</sup>鼠<sup>ねずみ</sup>になつた老人の姿が、幾分の同情を動かしたからで、また一つには、世<sup>せ</sup>故<sup>こ</sup>がこう云う場合に、こつちから口を切る習慣を、いつかつけてしまったからである。あるいは、また、そのほかに、始めの無気味な心もちを忘れようとする努力が、少しは加わつていたかも知れない。そこで李が云つた。

「どうも、困つたお天気ですな。」

「さようさ。」老人は、膝の上から、頤<sup>あご</sup>を離して、始めて、李の方を見た。鳥の嘴<sup>くちばし</sup>のように曲つた、鍵<sup>かぎ</sup>鼻<sup>ばな</sup>を、二三度大仰にうごめかしながら、眉の間を狭くして、見たのである。

「私のような商売をしている人間には、兩位、人泣かせのものはありません。」

「ははあ、何御商売かな。」

「鼠を使つて、芝居をさせるのです。」

「それはまたお珍しい。」

こんな具合で、二人の間には、少しずつ、会話が、交換されるようになった。その中に、老人も紙銭の中から出て来て、李と一しよに、入口の石段の上に腰を下したから、今では顔かお貌かたちも、はつきり見える。形容の枯槁ここうしている事は、さつき見た時の比ではない。李はそれでも、いい話相手を見つけたつもりで、囊ふくろや筒はこを石段の上に置いたまま、対等ことばな語づかいで、いろいろな話をした。

道士は、無口な方だと見えて、拂はか々ばかしくは返事もしない。「成程な」とか「さようさ」とか云う度に、齒のない口が、空気を嚙むような、運動をする。根の所で、きたない黄いろになつている髯も、それにつれて上う下えしたへ動く、——それが如何にも、見すばらしい。

李は、この老道士に比べれば、あらゆる点で、自分の方が、生活上の優者だと考えた。そう云う自覚が、愉快でない事は、勿論ない。が、李は、それと同時に、優者であるとう事が、何となくこの老人に対して済まないような心もちがした。彼は、談だん柄べいを、生活難に落して、自分の暮しの苦しさを、わざわざ誇張して、話したのは、完まったく、この済まな

いような心もちに、煩わされた結果である。

「まったく、それは泣きたくなるくらいなものですよ。食わずに、一日すごした事だつて、度々あります。この間も、しみじみこう思いました。『己は鼠に芝居をさせて、飯を食っていると思つてゐる。が、事によるとほんとうは、鼠が己にこんな商売をさせて、食つてゐるのかも知れない。』実際、そんなものですよ。」

李は撫然として、こんな事さえ云つた。が、道士の無口な事は、前と一向、変りがない。それが、李の神経には、前よりも一層、甚しくなつたように思われた。（先生、己の云つた事を、妙にひがんで取つたのだろう。余計な事は云わずに、黙つていればよかつた。）

——李は、心の中でこう自分を叱つた。そうして、そつと横目を使って、老人の容子を見た。道士は、顔を李と反対の方に向けて、雨にたたかかれてゐる廟外の枯柳をながめながら、片手で、しきりに髪を搔いてゐる。顔は見えないが、どうやら李の心もちを見透かして、相手にならずにゐるらしい。そう思うと、多少不快な気がしたが、自分の同情の徹しないと云う不満の方が、それよりも大きいので、今度は話題を、今年の秋の蝗災へ持つて行つた。この地方の蒙つた惨害の話から農家一般の困窮で、老人の窮状をジャステイフアイしてやりたいと思つたのである。

すると、その話の途中で、老道士は、李の方へ、顔をむけた。皺の重なり合った中に、可笑しさをこらえているような、筋肉の緊張がある。

「あなたは私に同情して下さるらしいが、」こう云つて、老人は堪えきれなくなったように、声をあげて笑つた。鳥が鳴くような、鋭い、しわがれた声で笑つたのである。「私には、金には不自由をしない人間でね、お望みなら、あなたのお暮し位はお助け申しても、よろしい。」

李は、話の腰を折られたまま、呆然として、ただ、道士の顔を見つめていた。(こいつは、氣違いだ。)——やつとこう云う反省が起つて来たのは、暫くの間、瞳目して、黙つていた後の事である。が、その反省は、すぐにまた老道士の次の話によつて、打壊された。「千鑑や二千鑑でよろしければ、今でもさし上げよう。実は、私は、ただの人間ではない。」老人は、それから、手短に、自分の経歴を話した。元は、何とか云う市の屠者だつたが、偶々、呂祖に遇つて、道を学んだと云うのである。それがすむと、道士は、徐に立つて、廟の中へはいつた。そうして、片手で李をさしまねきながら、片手で、床の上の紙銭をかき集めた。

李は五感を失つた人のように、茫然として、廟の中へ這いこんだ。両手を鼠の糞と埃と

の多い床の上について、平伏するような形をしながら、首だけ上げて、下から道士の顔を眺めているのである。

道士は、曲つた腰を、苦しそうに、伸ばして、かき集めた紙銭を両手で床からすくい上げた。それから、それを掌てのひらでもみ合せながら、忙せわしく足下へ撒きちらし始めた。鏘々然そうそうぜんとして、床に落ちる黄白こうはくの音が、にわかには、廟外の寒雨かんうの声を圧して、起つた。――撒かれた紙銭は、手を離れると共に、忽たちまち、無数の金銭や銀銭に、変つたのである。……

李小二は、この雨銭うせんの中に、いつまでも、床に這つたまま、ぼんやり老道士の顔を見上げていた。

下

李小二は、陶朱とうしゆの富を得た。偶たまたま、その仙人に遇つたと云う事を疑う者があれば、彼は、その時、老人に書いて貰つた、四句の語を出して示すのである。この話を、久しい以前に、何かの本で見た作者は、遺憾ながら、それを、文字通りに記憶していない。そこで、大意を支那のものを翻訳したらしい日本文で書いて、この話の完おわりに附して置こうと思う。但

し、これは、李小二が、何故、仙にして、乞丐きつがいをして歩くかと云う事を訊ねた、答なのだ  
 そうである。

「人生苦あり、以て樂むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚  
 だ、無聊ぶりようなり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに。」

恐らく、仙人は、人間の生活がなつかしくなつて、わざわざ、苦しい事を、探してある  
 いていたのであろう。

(大正四年七月二十三日)



# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1998年12月6日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 仙人

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>